

小田原の遺跡探訪シリーズ 1

羽根尾遺跡群

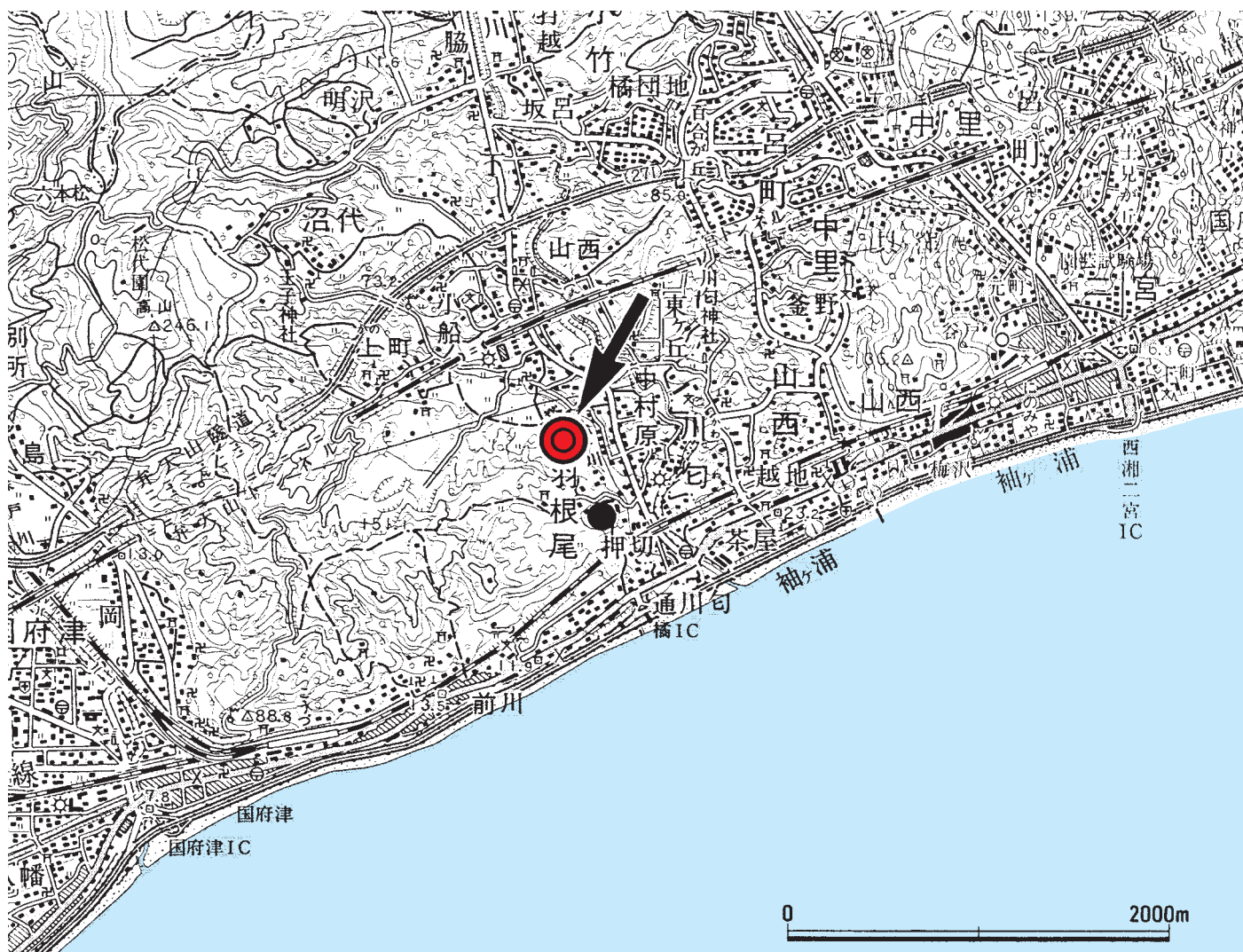
—羽根尾貝塚・羽根尾横穴墓群と周辺遺跡—



小田原市教育委員会

例 言

- 1 本書は、散策しながら遺跡を学べるガイドブック「小田原の遺跡探訪シリーズ1」として作成しました。今回は、小田原市羽根尾・中村原に所在する羽根尾遺跡群を取り上げ、内容は平成5～11年に実施された羽根尾工業団地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査成果を中心に構成しました。
- 2 本書の刊行は、平成17年度国庫補助事業である「埋蔵文化財保存活用公開事業」の一環として実施しました。
- 3 本書の作成にあたっては、以下の諸氏・諸機関から御指導・御協力を頂きました。記して感謝申し上げます。(敬称略・順不同)
戸田哲也、相原俊夫、玉川文化財研究所
- 4 本書の作成は、小田原市教育委員会生涯学習部文化財課山口剛志が担当者となり、同課佐々木健策・渡邊千尋が補佐しました。



第1図 遺跡位置図 (1/50,000) (玉川文化財研究所2003a) ●本遺跡 ●羽根尾堰ノ上遺跡

[表紙] 羽根尾遺跡群空中写真 [裏表紙] 羽根尾貝塚出土関山Ⅱ式土器

I 羽根尾遺跡群の概要

1 羽根尾遺跡群の歴史と環境

羽根尾遺跡群は、神奈川県小田原市羽根尾・中村原に所在し、J R 東海道線国府津駅の北東約2 km、相模湾からは約1 km内陸に入ったところにあります。地形的には、大磯丘陵南西部の不動山（328m）などの曾我山から北東へ延びる小丘陵があり、この小丘陵が尾根と谷からなる複雑な地形を呈して中村川沿岸の低地部に接しています。遺跡群は、この尾根の先端部から低地部にかけての範囲に立地しています。

羽根尾遺跡群は、縄文時代前期の貝塚、古墳時代前～中期の^{ほうけいしゅうこうぼ}方形周溝墓・遺物集中、古墳時代後期～平安時代の集落跡、古墳時代後期～奈良時代の^{よこあなぼ}横穴墓、中・近世の集落跡などからなる遺跡の総称です。この遺跡群には、全国的にも有名な羽根尾貝塚のほか、谷津・穴口・羽根尾・^{いたどり}板取（つくだ）横穴墓群などが含まれています。

これらの遺跡は、尾根の斜面に横穴墓という墓が造られ、また低地部には貝塚や竪穴住居跡など生活の拠点となった集落が営まれており、地形によって土地利用の方法が異なっていました。標高は、最も高い穴口横穴墓群（C群）で62m、最も低い低地部の集落で20mを測り、比高差が42mある遺跡群です。

羽根尾遺跡群周辺にも多くの遺跡があります。本遺跡群東側の橘中学校内にある羽根尾^{せぎのうえ}堰ノ上遺跡は、弥生時代中期、古墳時代前・後期、奈良・平安時代の竪穴住居跡が発見され、頻繁に集落が営まれました。また、弥生時代の20号竪穴住居跡から出土した鳥形土器は全国的にも貴重です。

本遺跡群北側の小船森遺跡は、弥生～中・近世の遺構・遺物が発見され、中世の有力御家人中村氏の^{きょかんあと}居館跡との指摘もあります。また、総数4,838枚の銭が埋納された中世土坑も注目です。

このように、羽根尾遺跡群を含めた橘地区は、縄文時代～中・近世の遺跡が濃密に分布しており、小田原の歴史を語る上で欠かせない地域といえましょう。



写真1 羽根尾堰ノ上遺跡出土鳥形土器

2 羽根尾遺跡群の調査

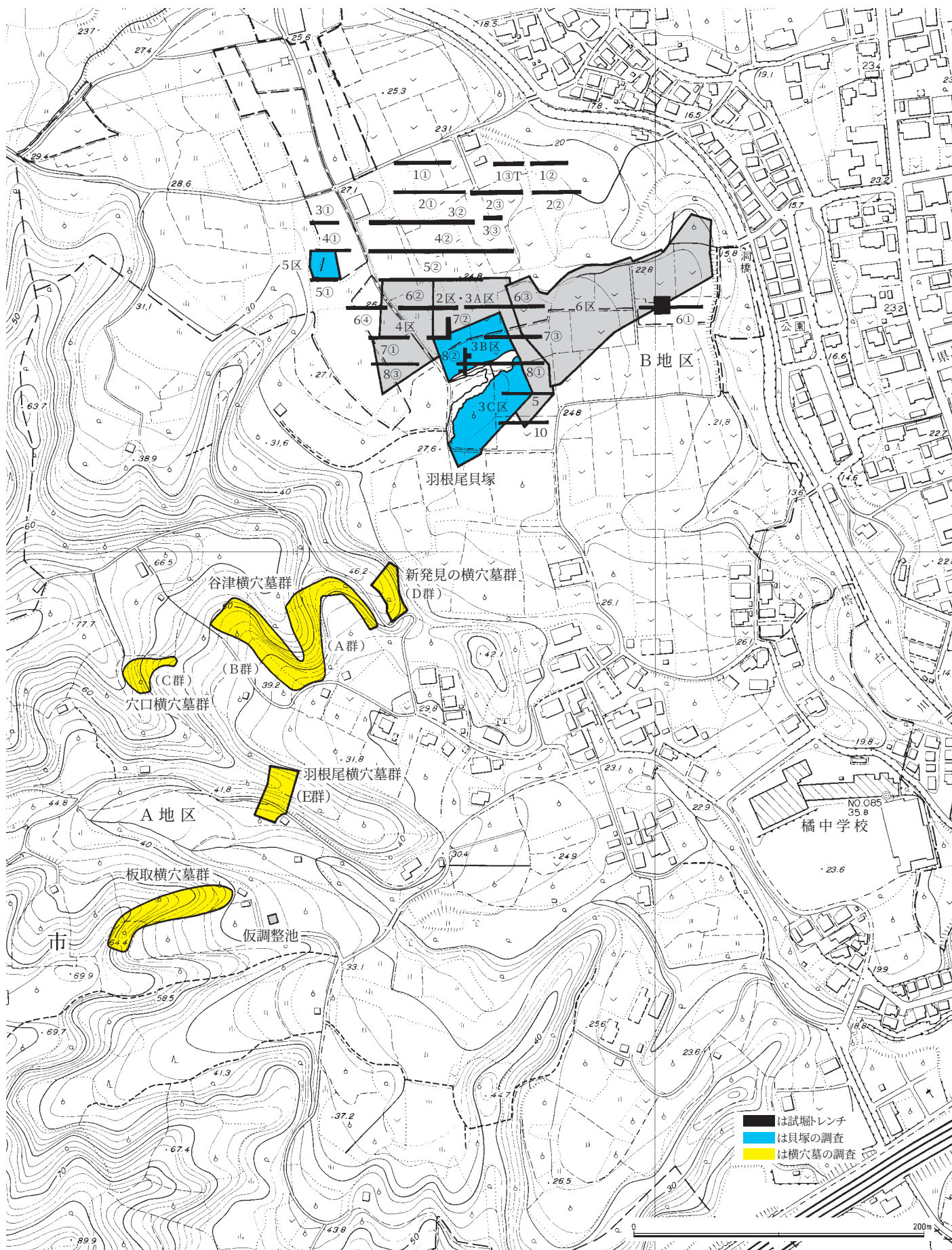
羽根尾遺跡群の調査は、羽根尾工業団地（現在の西湘テクノパーク）建設に先立ち、羽根尾工業団地内遺跡発掘調査団（団長戸田哲也）によって実施されました。その結果、羽根尾貝塚や谷津・穴口・羽根尾・板取（つくだ）横穴墓群などが調査され、後で解説するような多大な成果が得られました。

ここで、羽根尾遺跡群調査の経過を簡単に説明しましょう。まず、分布・試掘調査の第Ⅰ・Ⅱ期調査は、平成5年2月～6月、平成5年11月～平成6年3月に行われました。このうち、第Ⅰ期調査では、羽根尾貝塚に関連する縄文時代前期の泥炭層^{でいたんそう}が発見され、この地区に縄文時代前期の遺跡もあることが初めて明らかになりました。

本格調査は、平成6年8月～平成7年3月の第Ⅲ期調査から行われ、谷津・穴口横穴墓群が調査されました。平成7年10月～平成8年7月の第Ⅳ期調査は、穴口・羽根尾横穴墓群のほか、低地部で古墳時代後期～平安時代初頭と中・近世の集落跡の調査が行われました。最後に、平成10年7月～平成11年7月に第Ⅴ期調査が行われ、板取（つくだ）横穴墓群と羽根尾貝塚を含む低地部の遺跡が調査されています。



写真2 羽根尾貝塚全景



第2図 羽根尾遺跡群調査区位置図 (1/5,000) (玉川文化財研究所2003 a に加筆)

Ⅱ 縄文時代（羽根尾貝塚）

1 羽根尾貝塚の概要

羽根尾貝塚は、今から5,350～5,750年前の縄文時代前期に形成された貝塚と泥炭層^{でいたんそう}からなる遺跡です。神奈川県内の相模湾沿岸で発見された貝塚は、羽根尾貝塚を含めて15箇所ありますが、相模川以西の神奈川県西部に限れば平塚市万田貝塚・五領ヶ台^{まん だ ごりょう が だい}貝塚に次いで3例目という貴重な発見となりました。また、泥炭層遺跡としても、神奈川県内初の発見となりました。

貝塚は、西側の尾根から低地部の北東へ向かって延びる微高地緩斜面に形成されていました。調査では、100m離れていた3 C区と5区の2地点から合計9箇所の貝層が確認されました。最大の貝層でも、20.8×8.0mの範囲に厚さ50cmの規模とさほど大きくはないので、長期にわたる継続的な使用ではなかったようです。

また、貝塚が立地する中村川沿岸の低地部は、時代によって地形が大きく変化していたことが調査でわかっています。9,000～6,000年前は、古中村湾と呼ばれる海水が進入した海岸地形でした。その頃は、縄文海進と呼ばれる地球温暖化によって海水が増し、現在の海岸線より4 mも高いところまで海が入り込んでいました。6,000年前頃になると、地震による地盤の隆起によって相模湾への出口が塞がれた汽水性^{ふさ き すいせい}の湖（古中村潟）になり、羽根尾貝塚が形成された頃の6,000～5,000年前には淡水湖^{たんすい こ}に変わりました。その後は、湖が徐々に陸化して現在の地形になっていったのです。



写真3 羽根尾貝塚1号貝層全景

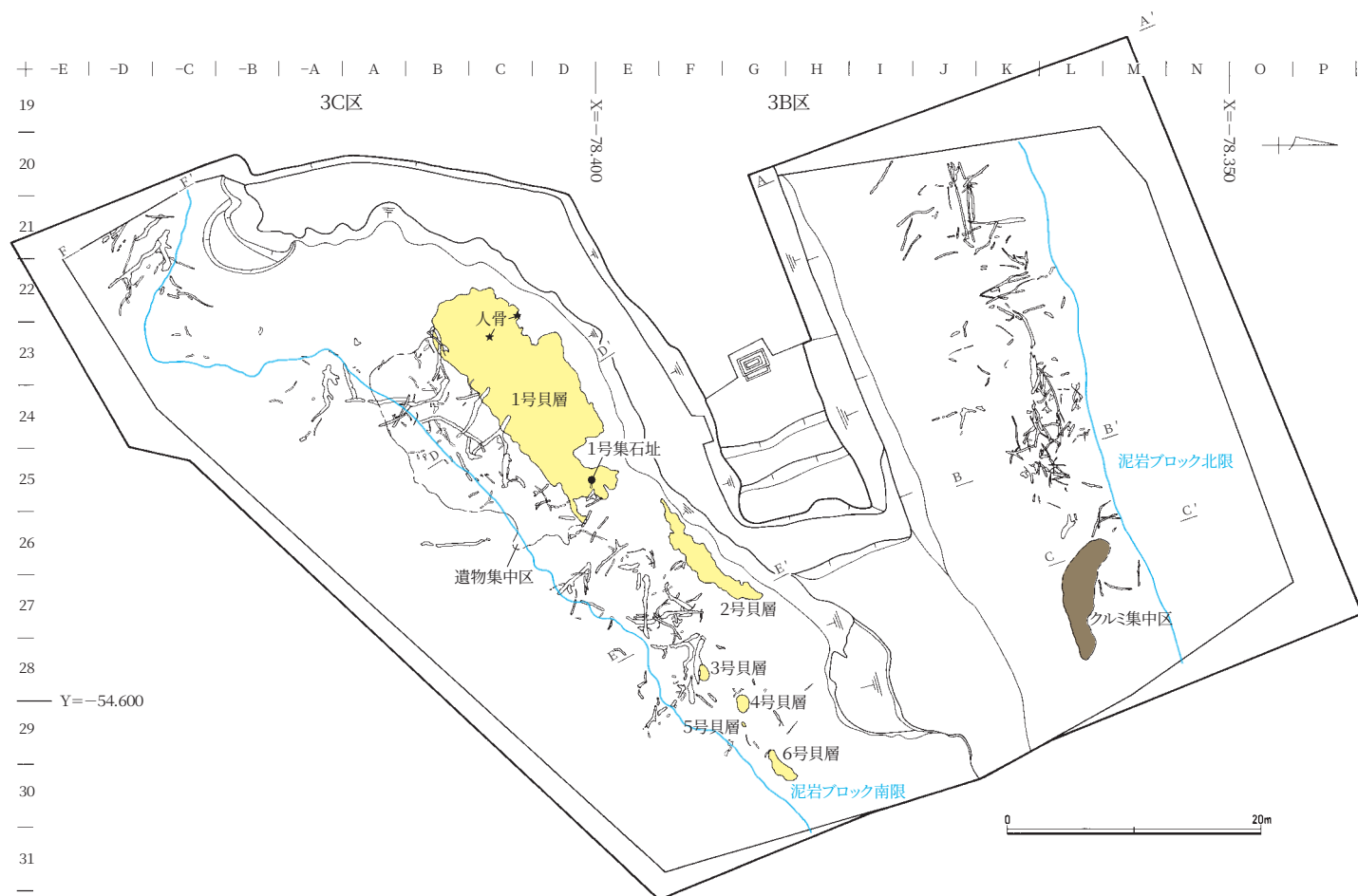


写真4 羽根尾貝塚1号貝層堆積状況

淡水湖沿岸に形成された羽根尾貝塚では、外洋に面した沿岸に生息するダンベイキサゴ、海水と淡水が混じる汽水域に生息するヤマトシジミの2種類の貝が大多数を占めていました。このほかは、ダンベイキサゴと同じ生息域のコタマガイ、外洋の岩礁^{がんしょう}などの磯に生息するサザエ・バテイラ・イシダタミ、汽水域のタニシ類などでした。

羽根尾貝塚のもうひとつの特徴は、泥炭層から多量の遺物が発見されたことです。泥炭層とは、水分を多量に含んだ主に有機質からなる土層のことです。この土層の中では、通常の遺跡では腐ってしまう木などの植物質や、骨・角などの動物質から作られた遺物が泥炭層によって保護されるため、現在まで腐らずに残るのです。羽根尾貝塚では、漆塗り^{うるしぬ}の木製容器・竪櫛^{もくせい}、木製の櫂^{たてぐし}・弓^{かい}、骨角製の髪飾^{こっかくせい}・釣針^{かみかざり}などのほか、カツオなどの魚骨^{ぎょこつ}、イノシシ・イルカなどの哺乳類骨^{ほにゅうるいこつ}など、当時の生活の痕跡が生々しく発見されました。まさに、「縄文時代のタイムカプセル」といわれる所以^{ゆえん}です。

このような縄文時代前期の泥炭層遺跡としては、福井県鳥浜貝塚^{とりはま}、山形県押出遺跡^{おんだし}、青森県三内丸山遺跡^{さんないまるやま}などが全国的に有名ですが、当時の人々の生活が私たちの想像をはるかに越えた豊かな暮らしであったことを知らせてくれる遺跡として重要です。



第3図 羽根尾貝塚3B・3C区貝層平面図(1/800)(玉川文化財研究所2003a)

2 出土した土器

羽根尾貝塚から出土した土器は、今から5,350～5,750年前に作られたものと考えられます。これらの土器の表面には、縄文土器の由来ともなった縄目文様のほか、縄を撚^よって作り出した環で付けたループ文、組んだ紐^{ひも}で付けた組紐文^{くみひももん}、粘土の粒を貼り付けた貼付文、竹を縦割りした半截竹管^{はんさいちくかん}で付けた鋸歯文^{きょしもん}・幾何学文^{きかがくもん}など、多種多様な文様が付けられていました。

このように、多彩な文様を様々な形で組み合わせることによって、写真6のような複雑かつ優美な装飾に仕上げられています。とくに、羽根尾貝塚が形成された縄文時代前期はこの傾向が強く、縄文時代の技と美が遺憾なく表現されています。

縄文土器に付けられた文様は、この美的要素のほかにもうひとつ重要な要素があります。それは、土器の形や文様が時代や地域によって異なることを利用して、縄文時代の時間を計る「ものさし」として使われていることです。この「ものさし」は、考古学的に「編年^{へんねん}」と呼ばれ、古い土器から新しい土器へと年代順に並べられたものです。羽根尾貝塚出土の土器をこの編年にあてはめてみると、南関東地方を中心に分布する関山式^{せきやま}・黒浜式^{くろはま}・諸磯a式^{もろいそ}と呼ばれる土器が主体でした。

また、文様がない代わりに、赤く彩られた土器や赤漆^{あかうし}が塗られた土器もわずかながら発見されています。この時代の人々は、色に対しても特別な美意識を持っていたという好例といえるでしょう。



写真5 羽根尾貝塚出土関山 I 式土器

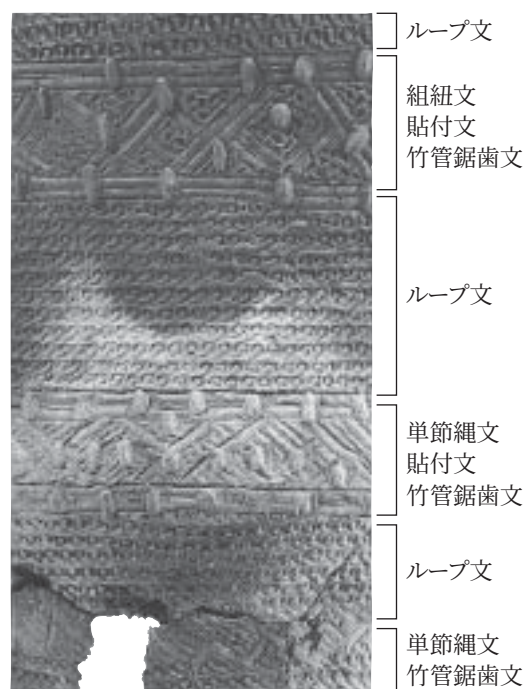


写真6 土器の文様(玉川文化財研究所2003c)

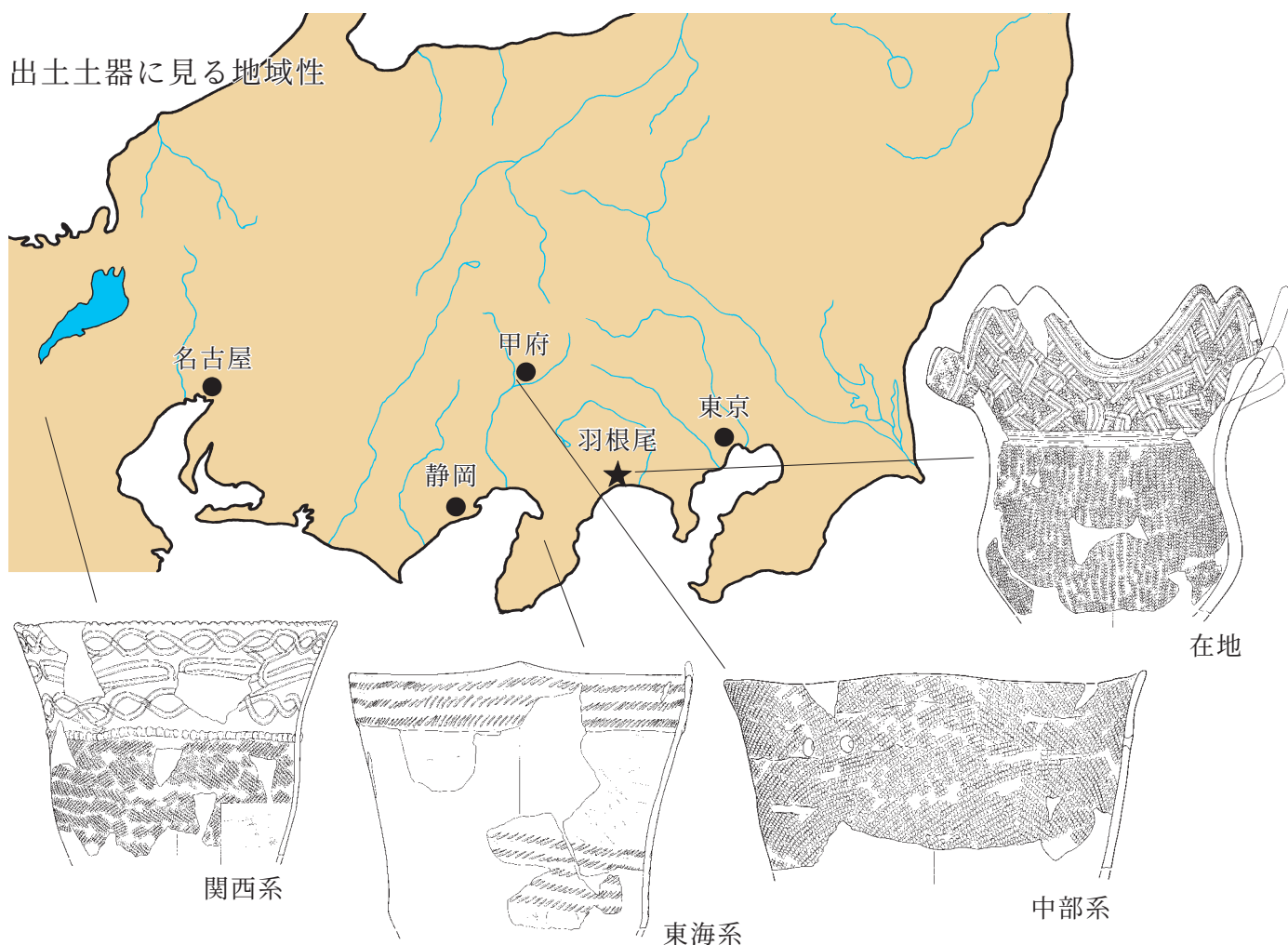
3 交流のあかし

羽根尾貝塚出土の土器は、南関東地方に分布する在地の土器が大多数を占めていましたが、地域の異なる中部・東海・関西地方の土器も少なからず発見されました。

中部地方では、山梨県から長野県諏訪地域に分布する^{しゃかどう}釈迦堂Ⅲ式土器が比較的まとまって確認され、その出土量は神奈川県内最大です。また、山梨県西部から長野県中・南信地域に分布する^{なかごし}中越式土器の出土も、関東地方では極めて稀な例です。

東海地方では、静岡県方面に分布する^{うわのぼう}上の坊式土器や、愛知県方面に分布する^{しみずのうえ}清水ノ上Ⅱ式土器が確認されています。そして、はるか遠方の関西地方から愛知県方面にかけて分布する^{きたしらかわ か そう}北白川下層Ⅱb式土器も発見されているのです。

では、本来羽根尾貝塚にあるはずのない周辺各地の土器がなぜ出土したのでしょうか。それは、各地域の人々と交流を行った結果、羽根尾貝塚にもたらされたものと考えられます。中部地方との山の道、東海・関西地方との海の道など、私たちが想像する以上の方法で遠方の人々と盛んに交流していたことを物語る遺物なのです。



第4図 羽根尾貝塚出土土器の地域性（玉川文化財研究所2003c）

4 羽根尾貝塚のくらし

羽根尾貝塚では、通常の遺跡では腐ってしまう木製・骨角製などの遺物が多量に残されていました。このため、獲得した食料や使われた道具などがより鮮明になったことで、縄文時代前期の羽根尾貝塚でのくらしが復元可能になりました。ここでは、出土した遺物から羽根尾貝塚における狩猟・漁撈・採集活動や加工技術など、当時のくらしについて考えてみましょう。

(1) 狩猟活動

狩猟活動を示す遺物としては、木製の弓のほか、矢の先端に装着して使う石鏃^{せきぞく}や槍の先に装着して使う^{きよくぶ ま せいせんとう き}局部磨製尖頭器などの石器があります。これらの道具を使って集団で狩猟を行っていたと考えられます。とくに、局部磨製尖頭器は、東北地方から運び込まれた硬質頁岩製の石器であり、長さが19.9cmもある大形の製品です。この石器は、狩猟や動物の解体などに使われたと考えられますが、他地域の土器と同じく東北地方との交流によって羽根尾貝塚にもたらされたと考えられ、重要な資料といえます。

これらの道具を使ってどのような獲物を捕獲していたのでしょうか。それは、貝塚に残された多くの動物の骨から推定することができます。陸に生息する哺乳類では、イノシシが最も多く、次いでシカ・サル・タヌキの順でした。サルが狩りの対象として比較的多かったのは驚きですが、ほかにもウサギ・カワウソ・アナグマ・キツネ・テンなどが獲物の対象となっていました。想像をたくましくすれば、これらの狩猟は、羽根尾貝塚背後に展開する不動山などの曾我山付近で行っていたのでしょう。

また、鳥類も捕獲していたようで、カモ類・クイナ類・ガン類など湖沼・河川・湿地^{こしょう}などの陸水域^{りくすいいき}に生息する水鳥が対象でした。これらは、冬に日本へ渡って来る鳥で



写真7 羽根尾貝塚木製弓出土状況



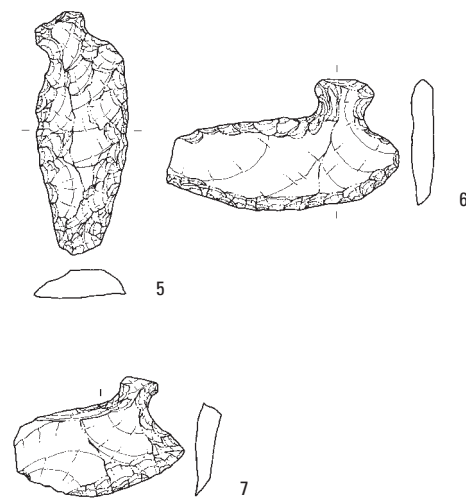
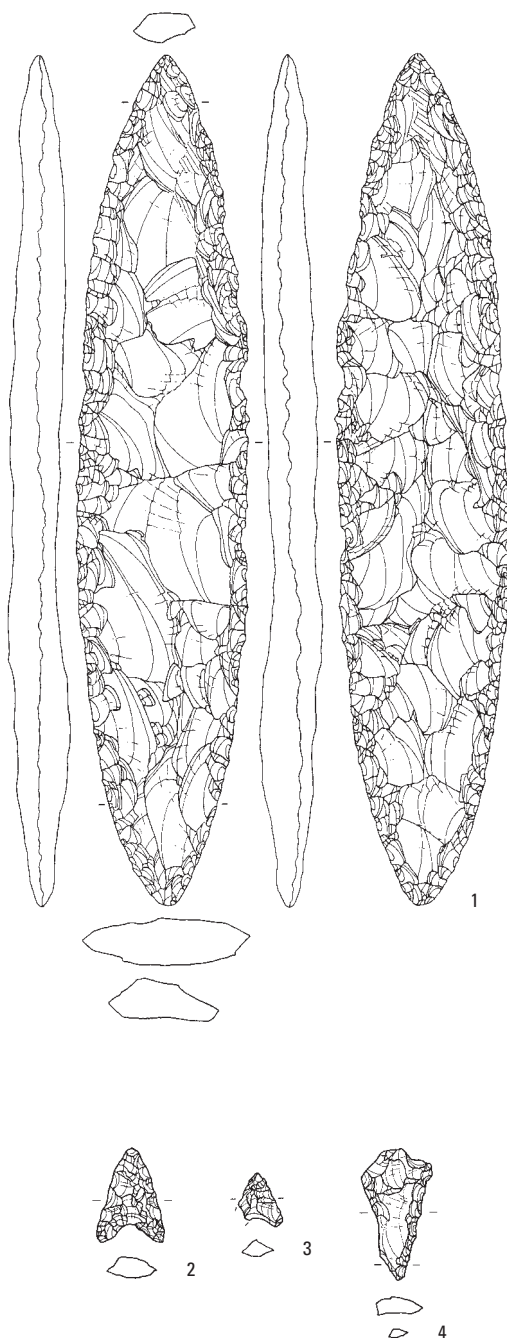
写真8 羽根尾貝塚出土石鏃

あることから狩猟の季節は冬が中心であり、狩猟の場所は貝塚が形成された頃にあった淡水湖の古中村潟で行われたと考えられます。また、ペリカン類の骨が貝塚から出土したのは、羽根尾貝塚が全国で初めてでした。

このように、狩猟によって得られた獲物は、羽根尾貝塚に持ち帰って切断したり、皮を剥いだりしたものと考えられます。その際の道具は、貝塚からも出土している石匙・^{いし}削器などの石器が使われたことでしょう。羽根尾貝塚の人々は、このようにして肉や毛皮などを手に入れたと推定されます。



写真9 羽根尾貝塚出土イノシシ頭骨出土状況



- | | |
|-----------|--------|
| 1 局部磨製尖頭器 | 4 石錐 |
| 2・3 石鏃 | 5～7 石匙 |

第5図 羽根尾貝塚出土石器（玉川文化財研究所2003a）

(2) 漁撈活動

羽根尾貝塚から出土した魚の骨は、カツオ・イシナギ属が最も多く、次いでハタ科・マダイ亜科・サメ類・ボラ科がやや多く出土しました。このほか、スズキ属・クロダイ属・タイ科・マグロ属・サバ属・イワシ類・ハゼ科・コイ科など、非常に多くの魚骨が確認されています。また、海に生息する哺乳類では、イルカ類を主体としてウミガメ類・アシカ類・クジラ類の骨が出土しています。

これらは、海や川で漁を行って捕獲したと考えられますが、この漁撈活動を示す遺物としては、骨角製の釣針・刺突具^{しとつぐ}があります。釣針は、完成品18点のほかに未製品も出土していることから、この場所で作られたようです。また、釣針は、全長2 cm前後の小型、4 cm前後の中型、6 cm前後の大型の製品が認められることから、小型はカツオ、中型はマダイ・ハタ、大型はイシナギ漁に使われたと想定されています。

また、釣漁に関連する遺物としては、結んだ釣糸が切れないように強化する役目をする撚り紐^{よひも}の「積^{せき}やま」が出土しています。大型魚を対象とした釣漁に使われたと推定され、羽根尾貝塚で多量に確認されているイシナギなどの漁に使われたのでしょう。

このイシナギは、体長2 m以上、重さ100kg以上に達する大型魚で、通常水深400～500mの深海に生息しています。春の産卵期になると水深100mより浅い岩礁に上ってくることから、この時期を狙って釣り上げたものと思われます。このような大型魚をどのような釣糸や仕掛けで釣ったのか非常に興味が持たれるのですが、現在も謎のままです。

このほか、漁撈に関連する遺物としては、網などのおもりである石錘^{せきすい}・土器錘のほ



写真10 羽根尾貝塚出土骨角製釣針



写真11 羽根尾貝塚カツオ椎骨出土状況

か、軽石で作られた浮子^{うき}が出土しています。網本体は出土しませんでしたでしたが、おもりと浮子の存在から、網漁が行われた可能性は十分に考えられます。網は、相模湾沿岸域に生息するサバ・マイワシなどの小型魚の漁に使われたのでしょうか。

ところで、羽根尾貝塚では、カツオが最も多く捕獲されていました。カツオは、初夏～秋口に相模湾の沖合に回遊してくる魚ですので、当然カツオ漁を行うには舟が無いことには成り立ちません。この時代の舟^{ふね}といえば、福井県鳥浜貝塚で出土したような一本の丸太材^くを削り抜いて作った丸木舟^{まるきぶね}でした。羽根尾貝塚では発見できませんでしたが、舟^{ふね}を漕ぐ時に使う木製の櫂^{かい}が18本も出土しており、同様な丸木舟を持っていたことが考えられます。このことから、丸木舟で相模湾の沖合へ出掛け、カツオ・イシナギなどの漁を盛んに行っていたことが推定されるのです。



写真12 羽根尾貝塚イルカ椎骨出土状況



写真13 羽根尾貝塚木製櫂出土状況

(3) 採集活動

採集活動によって羽根尾貝塚に持ち込まれた食料もあります。まず山の幸ですが、^{おびただ}夥しい数のオニグルミが4.8×1.25m、厚さ40cmの範囲に集中して発見されました。オニグルミのほとんどは、すでに殻が割られて実が取り出されていたのでこの場所で殻むきが行われたものと推定されます。オニグルミのほかには、ドングリなどの堅果類^{けんか}が出土しています。羽根尾貝塚背後に展開する不動山などの曾我山付近で木の実などの植物質食料を採集したものと思われる。

一方、海や川の幸の採集活動も行われています。まず貝塚にその痕跡がはっきり残っているように、貝の採集があります。羽根尾貝塚では、相模湾岸の砂浜海岸で採集されるダンベイキサゴや古中村潟からの流出河川で行われたヤマトシジミの採集が中

心的に行われ、さらに岩礁でのサザエ・バテイラ・イシダタミの採集、貝塚周囲の淡水域で行われたタニシの採集など、環境の異なる様々な場所で貝が採集されています。ほかには、湖沼や河川に自生するヒシの実が出土しており、タニシと同じく淡水域から採集されたものと考えられます。

次に、採集活動に使われたと推定される遺物は、それほど多くありませんが、球根や根を掘るための打製石斧や木製の掘り棒があります。また、植物繊維で編んだ編籠^{あみかご}が発見されていますが、これは採集の時や保管する時に食料を入れた容器として使われたのでしょう。

このほか、直接採集活動を示す遺物ではありませんが、木の実を加工する石器が多く出土しました。クルミなどの殻を割って実を取るための凹石^{くぼみいし}、実を粉にするための磨石・石皿^{すりいし いしざら}がこれに該当します。出土量は、磨石が1,183点と圧倒的に多く、次いで凹石63点、石皿49点と続きます。これら3種の石器でなんと出土した石器全体の88.6%を占めています。この粉を使って縄文クッキーなどを作っていたのでしょうか。

なお、食用に適さないミズキの実が編籠に保管されたような状態で発見されています。何の目的でミズキの実が採集されたのか現段階では不明ですが、発見された状態から考えて何かに利用するために採集されたのは間違いないでしょう。



写真14 羽根尾貝塚クルミ集中区と磨石出土状況

第6図 羽根尾貝塚出土掘り棒 (1/6) (玉川文化財研究所2003a)

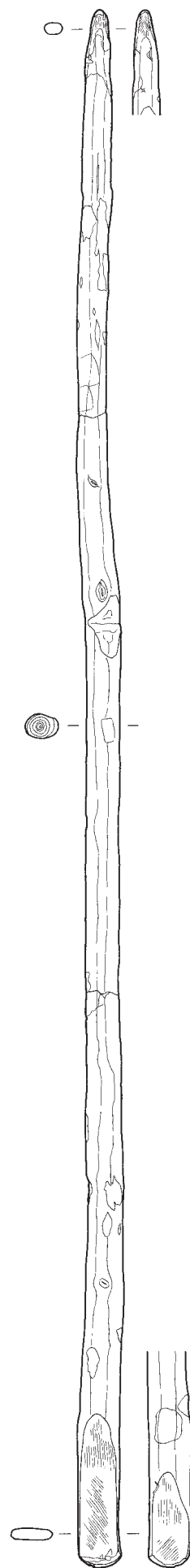
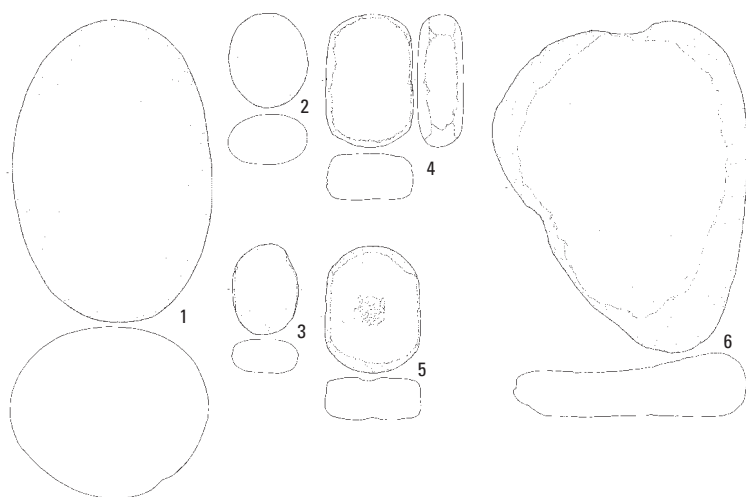




写真15 羽根尾貝塚編籠出土状況



1～4 磨石 5 凹石 6 石皿

第7図 羽根尾貝塚出土磨石・凹石・石皿 (1/10)

(玉川文化財研究所2003c)

(4) 加工技術

羽根尾貝塚では、木や骨角などの有機質遺物が腐らずに残っていたため、縄文時代前期の加工技術を多く知ることができました。ここでは、5,350～5,750年前に行われたすばらしい各種の加工技術について紹介してみましょう。

・漆塗り技術

羽根尾貝塚で最も卓越した加工技術といえば、漆塗りの技術でしょう。漆は、様々な製品に使われていることから、羽根尾貝塚ではある程度普及した技術と考えられます。まずは、木製容器が74点発見されましたが、これらの大多数は漆塗りが行われた中～大型の浅鉢形容器でした。木製容器は、比較的加工し易いケンポナシ属の木が中心に選ばれており、漆は黒のほか、胴部を黒、口縁部を赤に色分けしたものもあります。とくに後者は、黒と赤の漆を使うことによって装飾効果を高めており、当時の人々の美に対する意識が表現された貴重な遺物となっています。

漆は、櫛にも使われていました。羽根尾貝塚では、11本の櫛歯を撚り紐でつなぎ合わせ、黒漆で固めた上に赤漆を塗って仕上げた結歯式堅櫛^{けっしきたてぐし}が発見されています。漆が惜しみなくふんだんに使われており、デザインの的にも優れた全国的に大変珍しい櫛です。縄文時代の櫛は、この結歯式堅櫛のほかに木を刻み込んで櫛歯を作った刻歯式堅櫛^{こくしきたてぐし}が福井県鳥浜貝塚から発見されています。作り方は少し異なりますが、漆塗りの技術やツノ状の突起があることなど、両者はデザインの非常によく似ています。

また、推定150cm前後の長さの弓に幅0.5cmの樹皮を密着して巻きつけ、黒漆で固定

させた^{かばま}樺巻き弓や、赤漆が塗られた土器にも漆塗り技術を見ることができます。

このように、漆塗りの技術は様々なところに使われていますが、羽根尾貝塚出土の漆塗製品は関東地方で最も古いものといえます。また、全国的にも漆技術の高さで有名な福井県鳥浜貝塚や山形県押出遺跡との類似性も指摘されています。5,350～5,750年前にこのような高度な漆塗り技術をすでに習得していたことは、大変な驚きです。漆塗り技術は、どこからどのようなルートでもたらされたのか興味は尽きませんが、鳥浜貝塚や押出遺跡との関係は無視できないでしょう。



写真16 羽根尾貝塚漆塗木製容器出土状況



写真17 羽根尾貝塚出土赤漆塗結菌式豎櫛

・編む技術

出土した編籠を分析したところ、当時どのような編み方をして作っていたのかがわかりました。編み方としては、ゴザ目編みと多重菱形文が作り出される^{ます あじろ あ}柵網代編みの2種類がありました。このうち、柵網代編みについては、現在でも行われている方法です。すでに縄文時代には、この2種類の編み方が考案されていたわけです。

・骨角加工技術

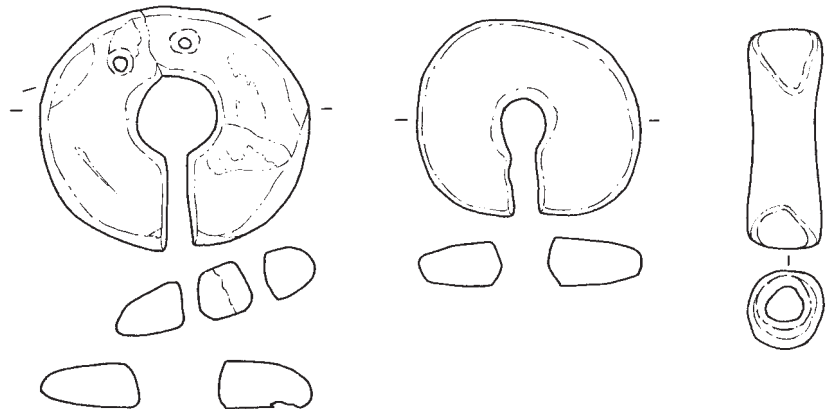
骨角製品のうち、最も優れた加工技術が発揮されているのは、身体を飾るための装身具類でしょう。それは、ペンダントのように紐などに通して首にかけ^{たれかざり}る垂飾・牙玉^{きばだま}やヘアピンである^{かみかざり}髪飾であり、非常に丁寧な彫刻や研磨・穿孔^{せんこう}などの加工が行われています。とくに、髪飾の頭部にあるツノ状の突起に刻みの彫刻が施された製品は、福井県鳥浜貝塚や青森県三内丸山遺跡から出土した製品に似た優品です。羽根尾貝塚の人々は、このような装身具を着飾って暮らしていたのでしょう。

・石器加工技術

出土した石器で高度な加工が施されたものは、^{けつじょうみみかざり} 玦状耳飾と^{くだたま} 管玉の装飾品です。玦状耳飾は、縄文時代に全国的な流行となったピアス状の耳飾ですが、羽根尾貝塚では3点^{かつせき} 発見されています。滑石という光沢のある石材を使って扁平な円形状に磨き、中央には丸い穴が開けられ、一端には切り込みが入れられた製品で、直径は6～7cmを測ります。中には、二つに割れてしまったため、新たに小さな補修用の穴を開けて使い続けた製品もありました。

また、管玉は、ネックレスのように紐などを通してつなげて使われたもので、円筒形の中心部に穴が開けられ、全面が磨かれています。

このように、縄文時代前期の人々は、硬い石材に小さな穴を開けるなどの高度な加工技術も習得していたのです。



第8図 羽根尾貝塚出土玦状耳飾（左2点）・管玉（右）
(2/3)（玉川文化財研究所2003c）



写真18 羽根尾貝塚出土骨角製品(左7点:刺突具、中央2点:髪飾、右2列4点:垂飾)

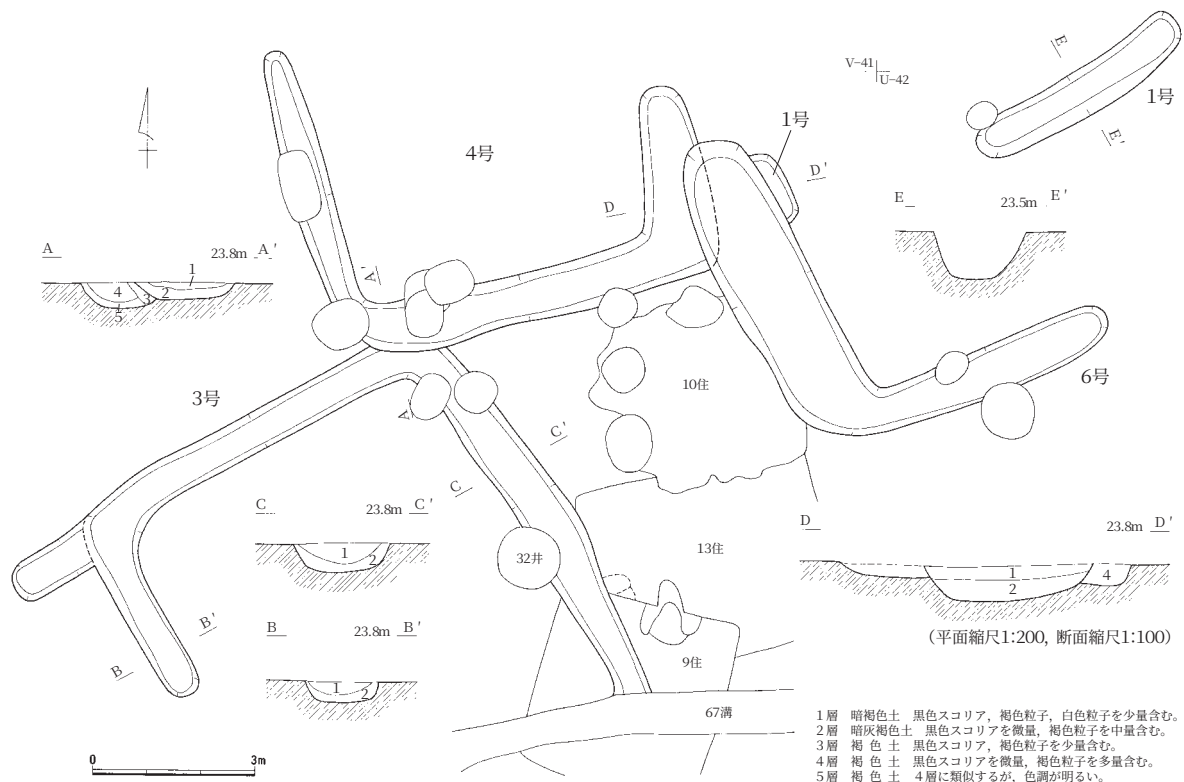
Ⅲ 古墳時代前～中期

羽根尾貝塚が形成された後は、しばらく羽根尾遺跡群から人々の痕跡が途絶えます。再び生活の痕跡が確認できるようになるのは、古墳時代前～中期になってからのことです。それは、羽根尾貝塚に隣接する低地部の4～6区と呼ばれるところから^{ほうけいしゅうこう}方形周溝墓、木製品集中区、土坑、遺物集中区が発見されたことでわかりました。この時期には、^{ほいき}墓域や生業活動の場として土地利用されていたようですが、生活の拠点となる集落は同時期の竪穴住居跡が確認された羽根尾堰ノ上遺跡付近にあったと推定されます。ここでは、方形周溝墓と木製品集中区に注目して説明することにしましょう。

1 方形周溝墓

方形周溝墓とは、弥生時代～古墳時代前期に造られた墓の一種です。中央には遺骸を納めた主体部が造られ、そのまわりを周溝が方形に巡る形態です。羽根尾遺跡群では、低地部東側の塔台川に程近い平坦面の6区から古墳時代前期の方形周溝墓が6基発見されました。

残念ながら遺骸を納めた主体部は、すでに削平されて残っていなかったので人骨や



第9図 羽根尾遺跡群6区1・3・4・6号方形周溝墓（1/100・200）（玉川文化財研究所2003b）

副葬品などは発見できませんでしたが、墓を区画する周溝が接するような状態で5基集中していました。周溝は、一辺が7.4～8.8mを測り、周溝の覆土からは墓の前で祭祀を行った際に使われたと推定される壺や高坏などの土器が出土しています。

2 木製品集中区

木製品集中区は、羽根尾貝塚の北西側に位置する低地部の4区から発見されました。木製品は、旧河道と思われる泥炭層から自然流木とともに直径約15mの範囲内で70点ほど出土しましたが、古墳時代前～中期の土器とともに確認されています。

出土した木製品の種類は、大足、田下駄、下駄状木製品、曲物か桶の底板、槽、横槌、スプーン状木製品、鼠返し、梯子などがあります。最も多いのは田下駄の部品、次いで大足の部品でした。田下駄は、輪カンジキ型田下駄と推定されます。また、梯子は、厚い板の片面に足掛けを等間隔に削り出した形態のものです。

大足・田下駄が出土したということは、遺跡群周辺に当時の水田があったことを連想させますが、残念ながら古墳時代前～中期の水田は現在確認されていません。



写真19 羽根尾遺跡群4区古墳時代前～中期木製品集中区出土大足・田下駄類

第10図 羽根尾遺跡群2～4・6区古墳時代～近世遺構分布図(1/1,250)(玉川文化財研究所2003b)

IV 古墳時代後期～平安時代

古墳時代後期～平安時代の羽根尾遺跡群は、^{ほったてばしらたてものあと} 竪穴住居跡と掘立柱建物跡が発見された低地部の3・6区と、横穴墓が発見された尾根斜面部に活発な活動の痕跡が認められるようになります。低地部には生活の拠点である集落、尾根部には墓域がそれぞれ形成されており、地形の違いによって土地の利用方法を変えていたようです。ここでは、集落跡と横穴墓群について解説しましょう。

1 集落跡

低地部平坦面の3・6区から竪穴住居跡30軒、掘立柱建物跡17棟が発見されました。このうち、年代が明らかな遺構を時代別に分けると、7～8世紀初頭の古墳時代後期では竪穴住居跡5軒、掘立柱建物跡2棟が確認されていますが、8世紀代の奈良時代になると竪穴住居跡12軒、掘立柱建物跡3棟と大きく発展するようになります。そして、9世紀代の平安時代では竪穴住居跡4軒、掘立柱建物跡1棟と減少傾向になっています。奈良時代には、竪穴住居跡・掘立柱建物跡ともに増加傾向にあることから、この集落は8世紀をピークとして7世紀から9世紀にかけて営まれたと考えられます。

古墳時代後期の集落は、掘立柱建物跡が2間×5間とやや大型であること、掘立柱建物跡が6区南側に集中していることが特徴です。また、後で説明する横穴墓群とはほぼ同じ時期に集落が形成されていることから、この集落の人々がこれらの横穴墓群を造った可能性が指摘できるかも知れません。



写真20 羽根尾遺跡群6区全景



写真21 羽根尾遺跡群6区7号住居跡検出状況

2 横穴墓群

横穴墓とは、丘陵斜面を横に掘り込んでその内部に遺骸を埋葬した墓であり、何度も埋葬できるよう入口を塞ぐことができる構造になっています。6～8世紀の古墳時代後期から奈良時代にかけて造られたもので、羽根尾・田島・上町などの小田原市東部を始めとする大磯丘陵にも数多く分布しています。

羽根尾遺跡群の調査では、集落が営まれた低地部に近い谷津横穴墓群と新発見の横穴墓群が6世紀後葉から造られており、その後、7～8世紀にかけて集落から遠くなる穴口・羽根尾・板取（つくだ）横穴墓群へと徐々に墓域が拡大されていったことがわかりました。ここでは、調査が行われた各横穴墓群の概要を説明しましょう。

(1) 谷津横穴墓群（A・B群）

谷津横穴墓群は、尾根の東側斜面に3基（A群）、反対側の西側斜面に11基（B群）の総数14基が確認されました。標高37～53mの斜面に構築されており、このうちB群1号横穴墓には棺を置く棺座も造られていました。これらの横穴墓は、古墳時代後期の6世紀後葉から7世紀にかけて造られたと考えられます。

谷津横穴墓群では、土師器・須恵器という土器のほか、金属製の直刀・鉄鏃・耳環、ガラス製の小玉、石製の勾玉・管玉・切子玉・小玉などの副葬品が出土しています。

(2) 穴口横穴墓群（C群）

穴口横穴墓群は、谷津横穴墓群西側の谷奥に14基が四段にわたって雛壇状に造られていました。さらには、各段を結ぶ墓道・階段状施設も確認されています。横穴墓群の中では、最も高い標高49～62mの南側斜面に構築されており、谷津横穴墓群より少し遅い7世紀中葉～8世紀前半の古墳時代後期から奈良時代にかけて造られたと考え

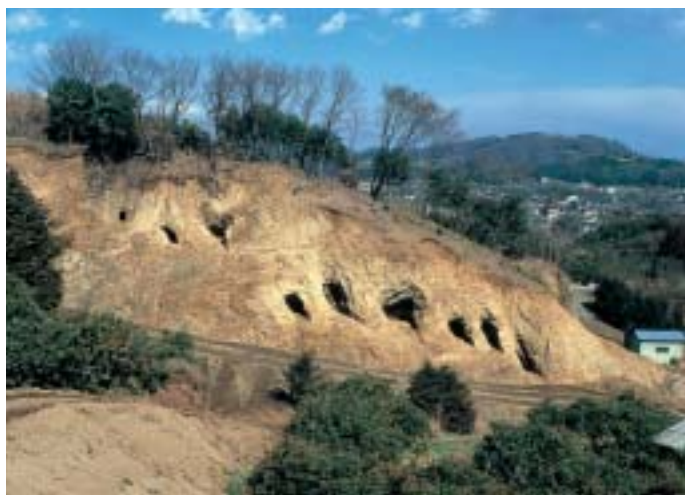
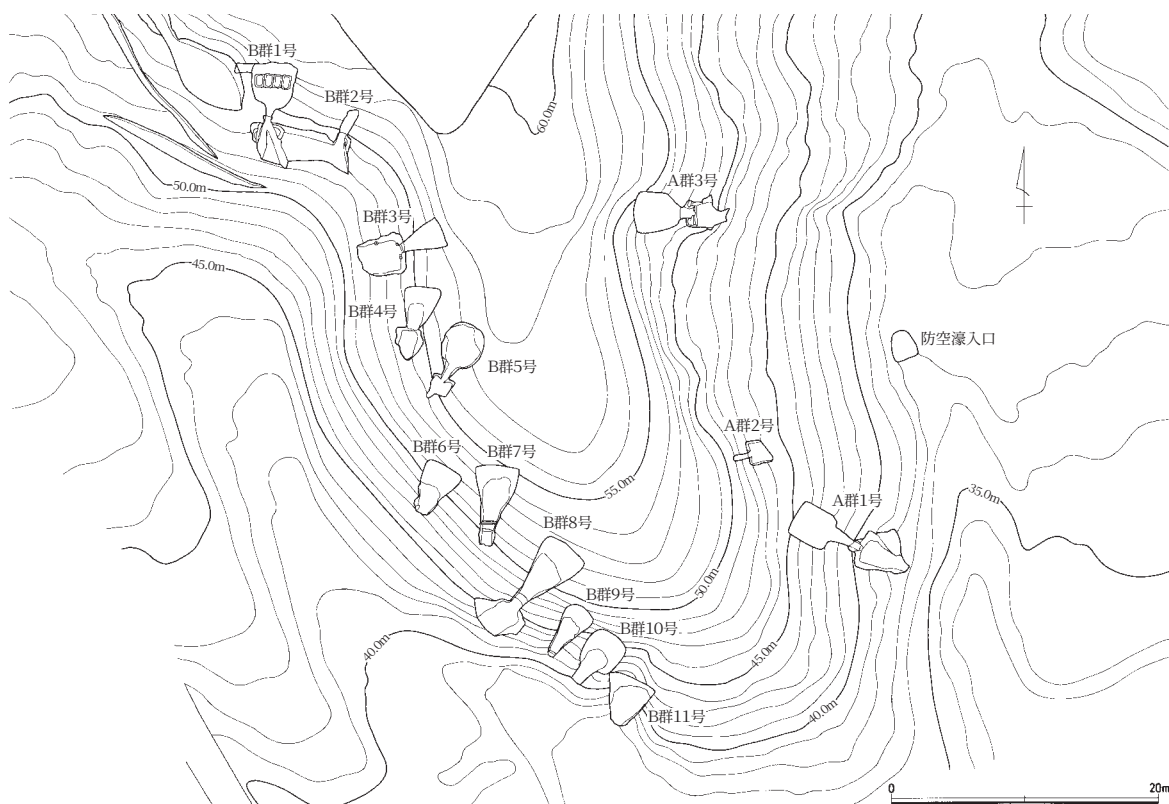


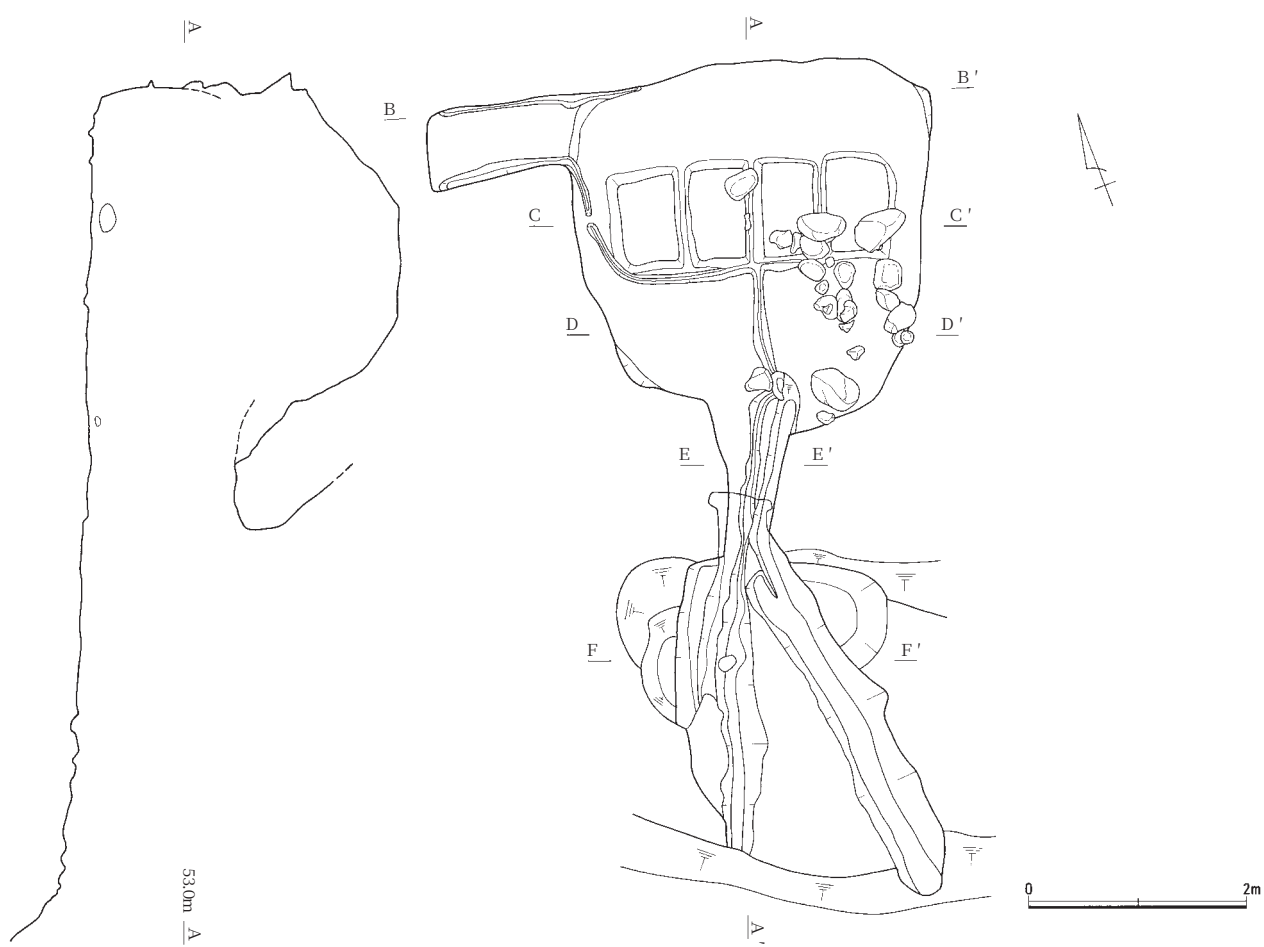
写真22 谷津横穴墓群（B群）全景



写真23 穴口横穴墓群（C群）全景



第11図 谷津横穴墓群（A・B群）分布図（1/800）（玉川文化財研究所2003b）



第12図 谷津横穴墓群B群1号横穴墓（1/100）（玉川文化財研究所2003b）

られます。

穴口横穴墓群から出土した遺物は、土師器・須恵器の土器、金属製の耳環、ガラス製・石製の小玉・^{うすだま}白玉などが認められました。

(3) 新発見の横穴墓群（D群）

D群と呼ばれた横穴墓群は、谷津横穴墓群の東側に隣接していますが、調査前までほとんどその存在を知られていませんでした。尾根の東側斜面に2基確認されました



写真24 谷津横穴墓群A群1号横穴墓



写真25 谷津横穴墓群B群1号横穴墓棺座



写真26 谷津横穴墓群出土土師器・須恵器

が、さらに北西側に数基が分布している可能性があります。横穴墓は、標高35～39mの斜面に構築されており、谷津横穴墓群と同じく古い段階の6世紀後葉～7世紀前半の古墳時代後期に造られたと考えられます。

この横穴墓群からは、土師器・須恵器、金属製の直刀・刀子・耳環、ガラス製の小玉、石製の勾玉・管玉・切子玉・小玉、土製の小玉などの副葬品が出土しましたが、中でも2号横穴墓は調査した横穴墓で最も多種多様な遺物が出土しました。

(4) 羽根尾横穴墓群（E群）

羽根尾横穴墓群は、谷津横穴墓群より一本南側の尾根に位置し、標高36～38mの南側斜面から4基が確認されました。8世紀第2～3四半期の奈良時代に造られたと考えられます。この南側斜面には、さらに29基以上の横穴墓が現状保存されていることから、総数34基以上が分布する羽根尾遺跡群の中で最大数を誇る横穴墓群です。

この横穴墓群からは、土師器が若干出土しましたが、全体的には遺物が非常に少ないことがわかりました。副葬品の多くは、後世に持ち去られてしまったのでしょう。

なお、ここでいう羽根尾横穴墓群とは、E群というひとつの尾根に造られた横穴墓の一群を指していますが、発掘調査報告書では谷津・穴口・羽根尾横穴墓群を含めた総称として羽根尾横穴墓群の名称が使われている場合があるので、注意が必要です。

(5) 板取（つくだ）横穴墓群

板取（つくだ）横穴墓群は、さらに羽根尾横穴墓群より一本南側の尾根に立地しています。調査では、標高52～54mを測る南側斜面から5基が確認されました。羽根尾横穴墓群と同じく出土した遺物がほとんど認められないため、詳細な構築年代は不明ですが、7世紀の古墳時代後期に造られたと考えられます。



写真27 横穴墓群出土耳環・玉類



写真28 板取（つくだ）横穴墓群全景

V 中・近世

1 中 世

中世の羽根尾遺跡群は、引き続き低地部の2・3・6区に活発な生活の痕跡を残しています。遺構は、竪穴状遺構9基、柵列2列、井戸址79基、溝状遺構67条、墓坑2基、土坑76基、ピット群が確認されました。年代は、出土遺物が少なかったため不確定な部分もありますが、ほぼ15世紀代を中心とした時期の集落と思われます。

遺構は、ほぼ東西・南北方向に延びる溝状遺構によって形成された長方形の区画内に構築されていることから、この長方形区画は屋敷地を示しているのでしょう。また、井戸の多さも目立ちます。これは、生活する上で欠かせない水の確保が繰り返された結果、多くの井戸が構築されたと考えられます。このことは、生活の拠点である集落が比較的長期間形成されていたことを物語っています。

出土した遺物は、15世紀代の^{とこなめさんこねばち}常滑産捏鉢・甕、瀬戸・美濃産^{りゅうせんよう}揉鉢・皿、かわらけ、土製品のほか、中国^{せいじわん}龍泉窯系青磁碗や瀬戸産^{めいびん}梅瓶など13～14世紀代の優品も出土しており、ある程度の権力者に関連した居住空間と考えることも可能でしょう。

2 近 世

近世になると、19世紀中葉に廃絶されたと推定される道路状遺構1条のみとなり、生活の痕跡はほとんど認められなくなります。近世の段階には、工業団地が建設される直前まで見られた田畠が一面に広がるような田園風景であったようです。このように、近世以降は、田畠としての土地利用が行われていたのです。



写真29 羽根尾遺跡群 3 B区15号井戸址



写真30 羽根尾遺跡群 6区1号道路状遺構

引用・参考文献

本書を作成するにあたり、引用または参考にした文献などを掲載しました。羽根尾遺跡群をさらに詳しく知りたい方は、参考にしてください。

- 内田 智雄ほか 2001 「地形・地質」『小田原市史』別編自然、小田原市
- 小田原市教育委員会 1986 『羽根尾堰ノ上遺跡』小田原市文化財調査報告書第19集、小田原市教育委員会
- 小田原市郷土文化館 2004 『特別展 縄文の技と美ー羽根尾貝塚にみる人々の生活と文化ー』小田原市郷土文化館
- 神奈川県立生命の星・地球博物館 2004 『企画展ワークテキスト「+2℃の世界～縄文時代に見る地球温暖化～」』神奈川県立生命の星・地球博物館
- 株式会社盤古堂 2002 『小船森遺跡』小田原市教育委員会
- 斎藤 忠 1998 『日本考古学用語辞典〈軽装版〉』学生社
- 杉山 幾一 1995 「考古」『小田原市史』史料編原始・古代・中世Ⅰ、小田原市
- 杉山 博久 1986 「旧橋地区に於ける横穴墓群ーその分布調査の記録ー」『小田原市郷土文化館研究報告』No23、小田原市郷土文化館
- 玉川文化財研究所 2003 a 『羽根尾貝塚 羽根尾工業団地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』玉川文化財研究所
- 玉川文化財研究所 2003 b 『羽根尾横穴墓群と周辺遺跡 羽根尾工業団地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』玉川文化財研究所
- 玉川文化財研究所 2003 c 『縄文時代のタイムカプセル 羽根尾貝塚』玉川文化財研究所

小田原の遺跡探訪シリーズ 1

羽根尾遺跡群

ー羽根尾貝塚・羽根尾横穴墓群と周辺遺跡ー

平成18年3月10日 印刷

平成18年3月15日 発行

編集 小田原市教育委員会

発行 〒250-8555 小田原市荻窪300番地

電話 0465-33-1717

<http://www.city.odawara.kanagawa.jp>

E-mail: bunkazai@city.odawara.kanagawa.jp

印刷 株式会社アルファ

